

# 地域課題解決に向けた自然資源の共同利用

## ——奄美市打田原集落を事例として——

北星学園大学 寺林暁良

### 1 目的

本報告の目的は、自然資源の価値・役割の変化に注目しながら、近年における自然資源の共同利用の意義について検討することである。自然資源に注目するのは、それが人びとによる働きかけを前提とした概念であり、日常生活や社会制度のあり方に密接に関係するからである（井上・宮内 編，2001 など）。農村部における過疎・高齢化は、耕作放棄地の発生などの地域環境問題の発生を伴うかたちで進行しており、現代日本の地域社会では改めて自然資源の利用・管理が必要な状況が広がっている。こうしたなか、なぜ今、自然資源の共同利用に再注目すべきかを議論する。

### 2 方法

本報告では、鹿児島県奄美市打田原集落を事例として取り上げる。同集落は奄美大島北部の半島に位置し、2018年時点の人口は60人（34世帯）、高齢化率は52%という過疎・高齢集落である。園芸作物の栽培が盛んであったほか、海や山での自給的な自然資源の利用も行われてきた。同集落において、2014年から住民9人（60?80歳代）に対して断続的なヒアリング調査（個別インタビュー、グループインタビュー）を実施した。ヒアリングで得られたデータのなかから、特に自然資源の利用方法、利用時期、利用・管理をめぐる社会制度とその変化についての分析を行った。

### 3 結果

ヒアリング調査では、自然資源として植物153種、魚介類83種など多様な自然資源利用がみられ、ユイタバ（田植え、屋根葺きなどの労働力交換）やサデ漁などの共同作業も確認できた。しかし、奄美大島の日本復帰（1953年）ごろを境に、非栽培的な自然資源の利用が衰退・消滅し、園芸作物にほぼ特化するとともに、自然資源利用をめぐる共同作業はほとんど失われ、個人単位（家族単位）の利用へと変化していった。

その後2000年代に入り、集落再生の取組みと結びつくかたちで、かつての自然資源利用の一部を再生する動きがみられた（ソテツ、ゲットウ、海水塩など）。これらの利用は、(1) 過少利用によって発生する生活環境問題の解決、(2) 高齢者や就労準備者の参加、(3) 集落財政の改善など、多様な目的のもとで行われてきたところに特徴がある。さらに、こうした利用を円滑にするため、個人所有から共同利用へ、個人の利益から集落の利益へという社会再編も伴ってきた。これらの自然資源は、多様な社会的課題の解決を目指す過程で、集落の共同資源として位置付け直されてきたといえる。

### 4 結論

地域社会の変動のなかで、自然資源の役割は変化してきた。そして、近年の地域社会の衰退という状況においては、地域再生のための共同資源としての役割が重視され始めている。つまり、今日における自然資源の共同利用は、単に自然資源の効率的な利用を行うためではなく、様々な社会的課題を解決しようという多義的・多目的なものであり、かつ地域社会の再編と結びついたものとして注目できるのである。

### 文献

井上真・宮内泰介 編，2001、『コモンズの社会学——森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社。